

マルティナ・ジルベスター



音楽家になるために重要なのは「愛情」。
愛情なしでは音楽はできない

Martina Silvester

本誌初登場となるマルティナ・ジルベスターさん。「人々の心を動かすような音楽を奏でたい」という彼女の熱い思いが、パワフルなステージパフォーマンスとなり、多くの人を魅了している。ドイツをはじめヨーロッパ各地で活躍中のフルーティストだが、その活動はクラシックにとどまらない。ポジティブで明るい彼女の魅力に迫った。

通訳・翻訳: Tomoko Iwashita / Photography: Christine Schneider / 取材協力: 宮澤フルート製造株式会社

ミュンヘンとパリで学んだ 学生時代

—ジルベスターさんがフルートを始められたきっかけは？

ジルベスター (以下S): 子どものころ、ある学生さんのコンサートを聴きにいった、そこで一目でフルートに魅了されました。しかし、フルートをはじめするには、まだ身体が小さかったので、少し待って、11歳になったときにようやく両親に楽器を買ってもらい、念願が叶って、フルートをはじめ

めることができました。私にとって、フルートは魅力溢れる「魔法の杖」だったのです。習い始めたころから、「貴女はとても上手だから、大きくなったら、オーケストラで演奏できますよ」と先生に励まされたことによって、私はモチベーションをアップして、たくさん練習しました。

—フルート奏者を目指すようになったのはいつ頃からですか？

S: 実は、俳優になりたかったのです。でも、俳優と音楽の勉強を両立するのは難

しいとわかり、音楽だけに専念することにしました。当時、学校でお世話になったフルートの先生は、M. アドリアン (アンドラーシュ・アドリアン夫人) でした。とてもいい先生でした。その後、順調にミュンヘン音楽大学に入学し、本格的にプロのフルート奏者を目指すことになりました。

—音楽をミュンヘンとパリで学んだとのことですが、フルート奏者になるためにどのような練習、学習をしてきましたか？